クルマ・社会・パートナーシップ大賞特集

自動車業界の輝く取り組み

大賞は自動車技術会の「キッズエンジニア」

もっと広がっていけば

日本自動車会議所（内山田竹志会長）は、第3回（2023年度）クルマ・社会・パートナーシップ大賞（CSP大賞、共催＝日刊自動車新聞社）の受賞者を決定した。大賞は子どもたちにものづくりの楽しさを知ってもらいたいとの考えから、小学生を対象とした学習イベント「キッズエンジニア」を開催する自動車技術会（大津啓司会長）を選定。選考委員特別賞は幼稚園児を対象にクラクション体験を組み込んだ交通安全教室を開催するはちどり（石原慧子社長、愛知県安城市）が受賞した。表彰式は9日、都内のホテルで開催する。

CSP大賞は、自動車業界で働く550万人と自動車ユーザーのさまざまな貢献に感謝を伝えるとともに、それらの取り組みが世の中に広がる一助になればという思いから21年に創設。3回目となる今回は、昨年9月の公募開始から11月末までに全国から62件の応募があった。

その中から選考委員会が表彰にふさわしい取り組みとして「グッドパートナーシップ事業」の25件を選定。さらに表彰の目的や日本自動車会議所のビジョンの基準に合致する大賞とそれに次ぐ選考委員特別賞、各部門賞を決めた。

部門賞は、モビリティに関する課題やモビリティの手段を通した社会課題の解決に向けた活動を表彰する「モビリティ・ソリューション賞」と、地域や自治体と協働・連携し、地域活性化に取り組む内容を表彰する「地域・コミュニティ活性化賞」、SDGs（持続可能な開発目標）の目的達成につながる取り組みに対する「SDGs貢献賞」、ユーザーとして自動車を大切に取り扱い、性別や年齢に関わらず幅広い層から評価される取り組みに贈る「自動車ユーザー連携賞」の4部門を設定。11の取り組みが上位賞として選ばれた。

「キッズエンジニア」では、エンジンの体感を通して、技術の魅力を伝えている

大賞

キッズエンジニアの取り組み

無償でものづくりの楽しさ学ぶ機会

自動車技術会

自動車技術会（大津啓司会長）が2008年から小学生を対象に開催している学習イベント「キッズエンジニア」。〝クルマの科学にふれながら楽しく学べる〟イベントとして、産学官協力の下で毎年開催している。将来の技術者を育成するため、そして、次世代を担う子どもたちがものづくりの楽しさを知り、技術者になる夢を持ってもらいたいとの思いから立ち上げた。

企業や大学で活躍する現役のエンジニアが講師となってじっくりと学ぶ機会を提供する「教室型プログラム」、気軽にものづくり体験ができる「体験型プログラム」などのメニューを設け、子どもたちの興味へとつなげる取り組みとなる。自動車を支えるさまざまな分野の科学技術やものづくりを学ぶ機会を無償で提供している。

近年は横浜・名古屋で隔年開催していたが、新型コロナウィルス感染拡大の影響から20年は開催を中止した。21年はオンラインのみ、22年は3年ぶりに横浜でリアル開催し、23年は名古屋で4年ぶりに開催した。

23年は新たなプログラムとして、整備士なりきり体験や「カメラとレンズの不思議を知ろう」と銘打った動画撮影体験を設定した。整備士体験では実車を持ち込み、故障修理や用品交換を体験することでクルマのトラブルを〝謎解き〟感覚で楽しめる内容とした。動画撮影体験では、走るミニカーを確実にとらえる撮影アイデアとデジタルカメラが持つミニカーを追いかける撮影機能を両立させ動画表現の喜びを得られる体験プログラムとした。

自動車技術会では、イベントを通して、科学やものづくりの楽しさを体験した子ども達が、将来、日本を支える技術者になってくれることを期待して今後も継続開催を予定する。同時に、時代とともにクルマに搭載される技術が変化していることなどを踏まえ、キッズエンジニアとして提案するメニューの変化なども模索していく考えだ。

◇

【コメント】この度は、栄誉ある賞をいただき、心より感謝を申し上げます。本事業は、子ども達に科学やモノづくりの面白さを知ってもらい、自動車産業にとどまらず、将来を担っていくエンジニアを育てるべく、2008年から15年にわたって、小学生を対象に企業・大学・地方自治体及び関連団体の皆様の御支援により継続してまいりました。今後もさまざまな工夫を凝らしプログラムを進化させ発展させてまいりますので、ご支援の程、宜しくお願い致します。

選考委員特別賞

交通教育における園児のクラクション体験

実体験通じ目指す「生命輝く交通社会」

はちどり

はちどり（石原慧子社長、愛知県安城市）は、自動車教習所「コアラドライブ安城」を展開するほか、幼稚園や小・中・高校の交通安全教室、高齢者講習、企業向け安全運転講習などを幅広く展開する。同社が運営する人と安全研究所は、愛知県内における交通死亡事故が2003年以降16年連続でワースト1位だったことを危惧し、「愛知県の中でも安城市が事故が一番少ない街にしたい」との思いで設立した。研修理念は「日本一、安全で事故のないまちづくりの実現」と掲げ、長年にわたって、安全運転の意識を高めることを念頭に交通教育に注力してきた。

交通教育活動を継続している中、21年、22年に子どもが通園バス、自動車に置き去りにされる事故が頻発した。「自分たちに何ができるのか」と考えたときに始めたのが、交通安全教室のカリキュラムの中での、園児の置き去り事故防止対策としてクラクション体験を採り入れることだった。

22年秋にはクラクション体験を組み込んだ交通安全教室の開催にこぎつけた。バスの運転席でクラクションを鳴らそうとするも、園児の力では、運転席に座ってクラクションを鳴らす力がないことが判明。そこで「立って両手で押してみよう」と提案し、全体重をかけて鳴らす必要性があることなどを実体験を通して理解してもらう取り組みを行った。

交通安全教室におけるクラクション体験は、園だけでなく、保護者からの反響も大きかったという。そこで、地域住民なども含めた多くの人たちへの体験機会の拡大を検討。コロナ禍に開始した教習所の休日にコースを自転車の練習場所として活用する取り組みの中で、乗用車のクラクション体験に乗り出した。

同社では〝生命輝く交通社会〟を目指し、今後も地域の交通安全センターとして、交通事故のない交通社会の実現に向けて活動を続けていく。

◇

【コメント】小さな子どもたちの尊い生命を守りたい。そんな一心で始めた取り組みが、栄えある授賞を賜りますこと深く感謝申し上げます。時代はデジタル化が進む中、子ども達の心に届く生命を守る教育は、体験に勝るものはないと考え活動してきました。交通安全教育に携わる一員として、全ての生命が交通事故で失われることがなく、自動車が人を幸せにする乗り物であり続けるため、今回の賞を励みに今後とも精進してまいります。

誇りある取り組みに光　日本自動車会議所 内山田竹志会長 挨拶

このたび第３回（2023年度）クルマ・社会・パートナーシップ大賞（ＣＳＰ大賞）の表彰式の開催にあたり、主催者を代表し、ご挨拶申し上げます。

まずは、本年１月１日に発生いたしました令和６年能登半島地震において亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、ご遺族ならびに被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。自動車業界といたしましても、関係機関や住民の皆様と連携して、被災地域の一日も早い復旧・復興に向けて、可能な限りの力を尽くしてまいる所存です。

大きな災害から始まることになりましたこの１年も、引き続き、海外における紛争や物価・エネルギー価格の高騰、気候変動、少子高齢化など、さまざまな難しい課題に日々直面していくことが予想されます。

自動車産業も100年に１度とも言われる大変革期の真っ只中にあります。自動車業界に身を置く550万人の方々は、新たなモビリティ社会の実現に向けて、課題を共有しながら、日本や地域の経済・社会を牽引するリーディング産業・業界の誇りをもって働いておられます。

この「クルマ・社会・パートナーシップ大賞」は、そうした550万人の方々や自動車のユーザーが、たとえ光が当たらないことであっても、自動車にかかわる全ての方々に果たされている貢献に対して「ありがとう」と感謝を伝えるとともに、それぞれの素晴らしい取り組みがもっと人々の目に触れ、世の中に大きく広がっていく一助になればとの思いから、日本自動車会議所が創立75周年を記念し、2021年に創設したものです。

昨年９月より第３回ＣＳＰ大賞の公募を開始いたしましたところ、皆様のご協力により、日本全国から昨年とほぼ同様の62件ものご応募をいただきました。皆様のこれまでの取り組みに心から敬意を表しますとともに、本大賞へのご理解・ご協力に対して、厚く御礼申し上げます。主催者として今後ご応募いただいた全ての取り組みを十分に理解し、社会に広く認知されるために支援してまいる所存です。

今回も選考委員の皆様による熱心かつ厳正な審議を経て、受賞者が決定される運びとなりました。大変ご多用の中、審議にお時間をいただきました選考委員の皆様に感謝申し上げますとともに、受賞者の皆様にはあらためてお慶びを申し上げます。

選考の結果、25件の「グッドパートナーシップ事業」が選定され、その中から「大賞」、それに次ぐ「選考委員特別賞」の受賞者が決定されました。その後、部門賞となる「モビリティ・ソリューション賞」「地域・コミュニティ活性化賞」「ＳＤＧｓ貢献賞」「自動車ユーザー連携賞」が選ばれました。受賞者は、これまでの第１回、第２回受賞者の方々にも増して、それぞれが持つ人々の熱意や創意工夫、実行力など、大変強く心に刻まれるものでありました。

受賞された取り組みにつきましては、私どもとしましても、より光をあて、幅広く広報を行ってまいりますので、事業者の皆様とともに関係各位のご協力をよろしくお願い申し上げます。

「クルマ・社会・パートナーシップ大賞」は、当会議所の大切な事業として今後も継続してまいります。皆様に認められ、成長していく自動車業界の重要な表彰制度にしっかりと育てていきたいと考えております。本賞の運営にもさらに力を入れてまいりますので、引き続き各方面からのご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。第４回となる来年度の大賞においても、数多くの素晴らしい取り組みに接することができることを大変楽しみにしております。最後になりましたが、受賞者の皆様、会員の皆様をはじめ、自動車業界、自動車にかかわる全ての皆様のますますのご発展をご祈念申し上げ、表彰にあたってのお祝いと感謝のご挨拶とさせていただきます。

白熱の議論重ねた選考

選考委員長
東京大学名誉教授
日本自動車研究所代表理事・研究所所長
鎌田　実

講評

第3回になります今回も、選考委員長を務めさせていただきました。選考委員のメンバーも前回と変わらず、幅広い観点から選考作業ができ、ホッとしているところです。今回は、件数は前年よりやや減りましたが、内容のいいものが多く、感謝の意を伝えたい素晴らしい活動の数々が選定されました。

選考のプロセスは昨年同様、それぞれの分野でグッドパートナーシップ事業に値するものを各選考委員に3～5件あげていただくとともに、大賞候補を数件推薦していただき、それらをもとに選考委員会で詳細に議論しました。その結果、25件のグッドパートナーシップ賞を選出しました。

賞の趣旨に鑑み、長年コツコツと活動を続けていたものや、これまでにない新しい活動などが高く評価された一方で、内容はいいけれど歴史が浅く実績が乏しいものや、客観的なエビデンス等に欠けるようなものは選外とさせていただきました。一度選外となっても、実績を重ねるとか、客観的な評価などが加えられると上位賞にもなりうるような活動もあり、是非、再応募をお願いしたいと思います。

選考委員会でかなり白熱した議論を重ねた上でのグッドパートナーシップ25事業ですので、いずれも甲乙つけがたいものばかり。こうした経緯を経て、上位賞の選考に移りました。多くの選考委員が推すものや、大賞候補として評価されたもの1件1件の内容を吟味し、上位賞に値するもの、大賞候補になるものを議論しました。

そして、大賞候補として2つが残り、自動車技術会のキッズエンジニア事業が大賞、はちどりの活動が大賞に準ずる選考委員特別賞となりました。キッズエンジニアについては、次世代を担う子どもたちに自動車技術の面白さを伝えるイベントとして2008年から長きにわたり実施しており、私自身も何度か会場に足を運んだことがあります。子どもたちが目を輝かせて作業等に取り組む姿は印象的で、そういう姿を見ると「ますます熱が入ってしまう」と、教える側の企業のエンジニアが語っていました。

園児置き去り事故を受けてのはちどりのクラクション体験は、今後、技術的な対応が進められていく中で、即効性のあるものとして園児にクラクションを鳴らす体験を学んでもらう活動です。歴史は浅いものの、社会課題にいち早く対応して動いたことが高く評価されました。幼児は大人が守るべきで、体験させることが適切か、という批判があるかもしれませんが、このような活動をすぐに企画・実行することは高く評価したいと思います。

このほか4つの上位賞に選ばれた11の事業も、それぞれ優れたもので、内容が多様に広がっています。このような活動に感謝の意を表し、広く周知し、横展開がなされていくことが望まれます。

選考委員

関根　千佳（ユーディット会長兼シニアフェロー）

森　摂（オルタナ代表取締役社長、「オルタナ」編集長）

加藤　和夫（日本自動車販売協会連合会理事相談役）

田口　亜希（日本財団パラスポーツサポートセンター　推進戦略部ディレクター）

山岡　正博（日本自動車会議所専務理事）

花井　真紀子（日刊自動車新聞社代表取締役社長）